

造形素材を中心とした子どもの表現

齋藤 正人

Children's Expression Using Modeling Materials

Masato SAITO

要旨

本稿は、2013年8月に実施した土庄町立大鐸幼稚園（香川県）における造形活動の事例から、活動中の子どもの姿を観察し、造形素材と造形行為の関係を明確にすることが目的である。実際に参加した子どもの反応や変化からわかったことは、造形素材への主体的な関わりにおいて、子どもの表現が育まれるということである。つまり、素材と行為が一体となった活動に展開することにより、子ども特有の世界観が表出されていくということである。その結果を踏まえ、造形素材を中心とした子どもの表現についての考察を行った。最終的には、一人ひとりにもともと備わっているものを引き出すことが、子どもの表現する態度へとつながっていくことを明らかにした。そして、そのための活動環境を整えることの重要性について、改めて確認することとなった。

キーワード：子どもの表現、造形あそび、造形素材、造形行為

1. はじめに

子どもの表現の魅力とは、子どもの心の解放にこそある。そして、子どもの主体的な造形行為によって、表現は自己と結ばれるものと考えられる。しかし、造形技術を優先するあまり、子ども本来の表現が引き出されていない作品を目にすることがある。表現とは、完成度の高い作品をつくることだけではないはずである。本稿において、子どもの表現を問い直す目的はそこにある。

子どもにとっての表現とは、決して特別なことではなく、活動の中でのあそびであり、言葉であり、体であり、生活そのものなのではないだろうか。このように考えれば、子どもは常に表現をしているといえるだろう。周囲の大人がそれに気づくかどうか、子どもの表現を育むことになるのである。論をすすめる前に、子どもの表現の多様性を理解し、子どもに寄り添う姿勢で活動を援助していくことの必要性を、まずは強調しておきたい。

本稿では、造形活動における造形素材と造形行為の関係を中心に、子どもの表現について考えていくことにする。具体的には、活動を実施した土庄町立大鐸幼稚園の事例から、子どもの表現がどのように育まれていくのかを明らかにしていきたい。

2. 造形活動の概要（土庄町立大鐸幼稚園の事例より）

2-1. 企画の背景

小豆島で造形活動を実施することになった背景は、筆者の「瀬戸内国際芸術祭2013」（会期：

2013年3月20日～4月21日、7月20日～9月1日、10月5日～11月4日)参加に関係する。参加作品「猪鹿垣の島」(図1、図2)を設置した場所が、今回の実施園の散歩コースであったことも、その理由の1つである。そこで、芸術祭に親しんでもらう目的から、土庄町役場商工観光課に造形活動の企画を提案した。その後、土庄町教育総務課の協力を得て実施に至った。

2-2. 企画の構成

活動名：「小豆島のドラゴンをつくろう！」

実施日時：2013年8月12日(月) 午前9:00～11:00(2時間)

実施園：土庄町立大鐸幼児園(香川県小豆郡土庄町)

参加園児：14名(3歳児3名、4歳児6名、5歳児5名)

実施スタッフ：岐阜聖徳学園大学短期大学部幼児教育学科(ゼミ生)5名

協力：土庄町教育委員会事務局教育総務課、土庄町役場商工観光課



図1 瀬戸内国際芸術祭2013 「猪鹿垣の島」(北側より) 2013年 土庄町肥土山地区



図2 瀬戸内国際芸術祭2013 「猪鹿垣の島」(南側より) 2013年 土庄町肥土山地区

2-3. 造形活動の素材と用具

使用した素材は、描画表現の最も基本的な素材の紙と絵の具である。紙は、ロール状の障子紙（8メートル）を準備した。障子紙は厚手の和紙を選択することにより、紙上での絵の具のにじみ効果を抑えた。絵の具は、アクリルガッシュ（5色）を準備した。アクリルガッシュは水彩絵の具に比べて粘度が高く、触感を楽しむことができるため、手足を使ったアクションペインティングに展開することを想定した。その他にカラーポリを準備し、活動の最後にドラゴンに見立てるための骨格として使用した。

用具は、描画用の筆、ハケ、ペイントローラーに加え、手づくり用具として、ペットボトルのふたに穴をあけたもの（中に入れた絵の具を振り出す）、スポンジを様々な形に切り抜いたもの（絵の具をつけてスタンピングする）を準備した。特に手づくり用具では、体全体の動きを伴った大胆なペインティングへの展開を期待した。

2-4. 造形活動の内容

活動への導入は、事前に筆者の芸術祭作品を見て、その印象を子どもたちに話し合ってもらったことから始めた。筆者の作品は、自然石と屋根瓦を用いた70メートルの細長い作品である。子どもたちからは、蛇やうなぎ、竜などの生き物に見えるとの意見が多かった。瓦を使っている部分が魚の鱗のように見え、また細長く蛇行した姿が蛇に見えたようである。話し合った意見を集約し、今回のテーマは「小豆島のドラゴン」に決定した。具体的には、活動の前半に絵の具による色あそび、後半にドラゴンづくりの作業を行うことになった。

最初は園庭に障子紙（8メートル）を広げ、絵の具でアクションペインティングを行った（図3、図4）。ここでは、何か具体的なものを描くのではなく、色あそびを中心とした造形行為に重点を置いた。次は、乾いた障子紙をドラゴンの鱗の形に手で破いたり、はさみで切り抜いたりした。ここでの紙を破るといった行為は、感覚を楽しむあそびへと展開した。活動の後半は、カラーポリ（8メートル）をブロワーで膨らませてドラゴンの胴体とし、そこに破いた紙を鱗に見立てながら貼りつけていった（図5、図6）。そしてドラゴンの頭、尾、手足をつけて完成させた。

造形活動のまとめは、完成したドラゴンを全員で担ぎ、遊戯室を泳がせることで、子どもたちが活動したそれまでの時間を総括させた（図7）。最後は小豆島のドラゴン伝説をつくったり、ドラゴンの名前を考えたりと、物語性のある活動に展開させて終了した。



図3 ペットボトルを使った活動の様子



図4 筆と刷毛を使った活動の様子



図5 カラーポリを膨らませた様子



図6 障子紙の鱗を貼りつける様子



図7 ドラゴンを泳がせている様子

3. 造形活動の実践結果から

今回の造形活動の目的は、造形素材との関わりから、子ども独自の世界観を引き出すことであった。以下に、紙と絵の具といった素材体験からみられた子どもの姿をまとめ、どのように表現として育まれていったのかを見ていくことにする。

3-1. 描画表現の発達過程とその特徴

描画表現の発達過程は、発達の個人差や子どもを取り巻く生活環境などの要素によって左右されている。単純に年齢で区分することは難しく、そのことは今回の事例からも明らかであった。そのため、子どもの描画表現を考える上での便宜的な区分として理解しておきたい。以下に記す事例は、活動の中で実際に見られた描画表現の特徴（一部）である。

おおむね3歳の特徴は、必ずしも具体的な形とはなっていないが、描いたものに意味をつける時期であり、描画表現の区分では「意味づけ期」と呼ばれている。この段階では、積極的に子どもの言葉に耳を傾け、共感し寄り添う姿勢が大切であった。また、手首の関節がコントロールできるよ

うになるにつれ、独立した丸が描ける時期でもある。丸い形を頭や胴に見立て、手や足のような線を描く「頭足人」と呼ばれる人物表現がみられた。このような直線と丸を組み合わせた描画表現では、線を描くだけの単純な行為であっても、筆の太さを変えることにより、造形あそびにつながる事ができた。また、絵の具の色数を増やすことにより、絵の具が紙上でにじんでいく様子を観察して楽しむこともできた。

おおむね4歳の特徴は、同じ画面に複数のものを配置して描く「カタログ期」と呼ばれる時期である。実際の活動においても、思いついたものや興味があるものを紙いっぱい描いていた。ここでは、羅列的に描かれたものを関連づける方法として、紙の上に街や動物園をつくることを提案し、物語性のある描画表現に展開するよう言葉かけを工夫した。

おおむね5歳の特徴は、これまでの描画経験をもとに、パターン化された絵や繰り返し描く絵が多くみられる時期である。これを「概念画」と呼び、図式化された記号的な表現といえる。この時期は、描き方に強いこだわりがあるため、描く時間を十分に確保することが大切であった。

3-2. 描画表現から色あそびへの展開

一般的に絵の具は、具体的なモチーフを描くための画材である。この認識は、前記したように描く経験を重ねてきた5歳児に最も強く表れていた。実際の活動をみても「好きなものを描く、上手に描く、知っているものを描く」といったことに意識が集中していたことがわかる(図8)。しかし今回の活動では、画材としてではなく造形素材として絵の具を扱うため、「体全体を使って絵を描くとどうなるのか」と子どもたちに問いかけを行いながら活動を進めている。そこで、子どもたちの好奇心をより引き出す工夫として、準備しておいた様々な用具の効果を実演して見せた。例えば、刷毛を使って「トントン、チョン、スースー」「ドンドン、ジャバジャバ」など、擬音語や擬声語に合わせてペイントする方法。または「うさぎはピョンピョン、狸は?・・・」などクイズ形式にしたりと、子どもたちと一緒に声を出しながらペイントを行った。この方法では、具体的なモチーフを描くことが苦手な子どもであっても、取り組みやすい活動となったようである。また、ペイントローラーでは、紙の上に1列に並び追いかけっこをした。この方法では、追いかけっこという行為の結果が、紙上に痕跡として残る。子どもたちは、自分の行為で意外な模様が出来たことに驚いたり、不思議な色の混色を発見することになった。穴をあけたペットボトル用具では、絵の具を振り出す様子をシャワーに見立てたり、調味料を掛けるなどのごっこあそびに展開した。

このように、用具体験は子どもならではの発想とその行為の即興性により、あそびを豊かにして



図8 具体的なモチーフを描く様子



図9 色あそびに展開した様子

いった。そして、一通り用具体験を終えると、手足を使ったアクションペインティングを積極的に行うようになった。この時点では、絵を上手に描く意識は薄れ、絵の具を使った色あそびを考え出すことに集中していたといえる。最終的に色あそびは、紙の白い部分を埋めつくす競争へと変化した(図9)。子どもたちは、絵の具という素材と出会い、素材と向き合う中で、体全体で紙に痕跡を残す造形行為に、満足感を得ていたようである。

3-3. 造形あそびの中から育まれた表現

今回の事例からわかることは、子どもは作品として完成させることだけが興味の対象ではなかったということである。むしろ活動過程での発見や驚きが、子どもの表現を引き出すことになっていた。具体例からいえば、障子紙の上で偶然にじみ合った色に感動し、虹に見立て、意図的に5色の絵の具をにじませた子どもの行為は、表現として見ることができる。絵の具の色選びと垂らす量からも、その子らしさは個性として表れていた。また、ペイントローラーで塗った跡が線路に見えることを発見し、友だちと協力して電車を描いた行為も、まさに表現である。足に絵の具をつけて歩き、足跡が蟻の行列に見えることに驚き、意識して蛇行する足跡をつけた行為も、表現そのものである。これらは活動の中で見られた子どもの姿の一部である。何気ない行為に、その子らしさや強いこだわりが見られ、造形あそびの中から表現が生まれた瞬間といえるだろう。

造形活動では、絵の具という素材をあそびの道具とすることにより、素材に主体的に関わる態度が示され、素材の特性を活かした様々な造形行為が試行される。そのようなあそびを中心とした活動過程にこそ、子どもにとっての重要な意味があるのである。このように考えれば、作品として完成させることだけを活動目的にしてしまっただけでは、子どもの自由な表現を育むことはできないだろう。一人ひとりにもともと備わっているものを引き出すことが、子どもの表現につながるものであり、そのための活動環境を整えることに重点をおく必要があるのである。

これらの実践結果を踏まえ、子どもの表現を育む造形素材について、より具体的にまとめてみたい。

4. 造形素材と造形行為の関係からみる子どもの表現

これまでみてきたように、子どもは自由な発想で素材をあそびの道具としている。そのあそびを活発にするためには、素材への期待感と興味を引き出すことが重要である。例えば、色数、形状、サイズ、量、触感、扱いの自由度から、十分に子どもの好奇心を刺激し、発想の広がりにつながる素材であるかということである。事例からもいえるように、子どもの造形活動では、好奇心を満足させることに大きな意味がある。そして、素材と行為が一体となった活動に展開することにより、子どもならではの世界観の表出につながっていくのである。つまり、素材の持つ特性が子どもの行為を活発にさせ、素材の扱い方の違いが子どもの表現を特徴づけるということである。このように、子どもの造形活動の過程には、常に素材との関わりがある。この素材体験を通しての造形あそびが、表現への展開を促しているのである。

子どもの表現の魅力とは、物事を直感で判断し、瞬時に自分の色と形に変換して表すところにある。その造形行為の即興性によって、子どもの思いや考えは凝縮され、力強い表現として現れる。本稿では、このような活動過程における子どもの表現の意味について、あらためて確認しておきたい。その上で、造形素材を中心とする表現活動から、世界を広げようとする子どもの意欲を大切に

していくことの重要性を強調したい。

5. まとめ

以上のようなことから、造形素材への主体的な関わりにおいて、子どもの表現が育まれていくということが明らかになった。そのためには、造形活動の十分な時間の確保と子どもの多様性を理解した活動援助が必要であることも付け加えておきたい。このような活動環境を整えることにより、子どもの心は解放され、自由な表現の表出につながっていくことになるのだろう。

本稿は、造形素材を中心に子どもの表現を考えてきたが、他にも共同制作など子ども同士のコミュニケーションから育まれる表現もある。また、活動中の子どもの言葉から表現に展開する方法があることも記しておきたい。大切なことは、あらゆる角度から子どもの表現を探っていくことであり、それは今後に残された課題である。

参考文献

- 1) 大坪圭輔：美術教育の動向. 武蔵野美術大学出版局, 2009.
- 2) 小串里子：みんなのアートワークショップ子どもの造形からアートへ. 武蔵野美術大学出版局, 2011.
- 3) 鬼丸吉弘：創造的人間形成のために—子どもの絵を考える. 勁草書房, 1996.
- 4) 子ども美術文化研究会：子どもが生み出す絵と造形—子ども文化は美術文化. エイデル研究所, 2012.
- 5) 佐藤学：驚くべき学びの世界—レッジョ・エミリアの幼児教育—. ワタリウム美術館, 2011.
- 6) 佐藤学・今井康雄：子どもたちの創造力を育む—アート教育の思想と実践—. 東京大学出版会, 2003.
- 7) 鈴木昌世：イタリアの幼児教育思想. 福村出版, 2012.
- 8) 高橋陽一：造形ワークショップを支えるファシリテータのちから. 武蔵野美術大学出版局, 2012.
- 9) レッジョ・チルドレン・ワタリウム美術館：子どもたちの100の言葉. 日東書院本社, 2012.

